

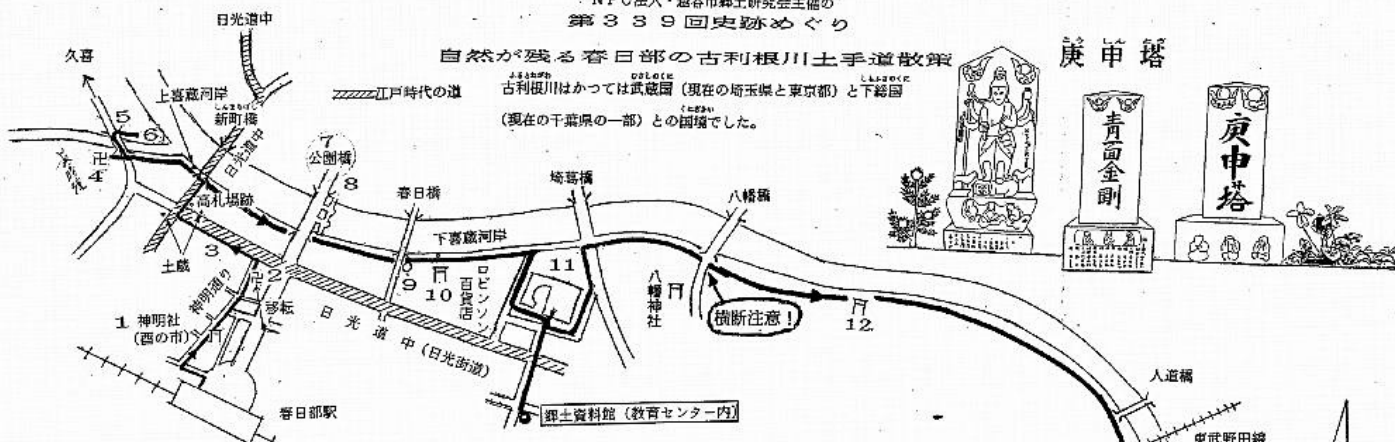
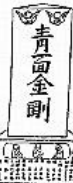
NPO法人・越谷市郷土研究会主催の
第339回史跡めぐり

自然が残る春日部の古利根川土手道散策

古利根川はかつては武蔵国（現在の埼玉県と東京都）と下総国

（現在の千葉県の一部）との国境でした。

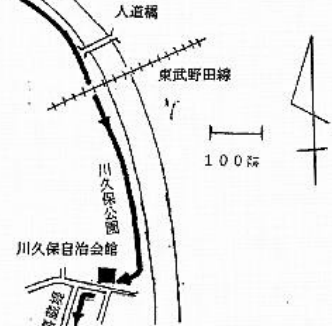
庚申塔



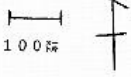
1. 粕壁のお酉様（神明様の酉の市）
粕壁の神明通りの神明社では、毎年12月・14日に酉の市(いち)が開かれて賑わう。
2. 山中の千手観音堂
江戸時代の俳諧師、増田眼牛が背負っていた千手観音を祀るお堂。眼牛の墓がある。
3. 日光街道
江戸日本橋から日光に行く江戸時代の道。耐火建築の明治の頃の土蔵が見られる。
4. 春日部重行公の墓
中世に活躍した春日部重行(1498)の墓で、春日部市の市祖となっている。
5. 十文橋
明治24年に架けられた「十文渡し」と呼ばれた橋で、橋の渡り賃が十文(一圓)だった。
6. 古隅田川
古代の頃は大きな川で、隅田川と呼ばれ、かつての「梅若丸」伝説が残っている。
7. 古利根川公園橋と彫刻
古利根川に架かる公園も兼ねた橋で、ブロンズ像が多く飾られている。
8. 千住馬車鉄道の壁面
明治の頃に千住と粕壁(14)の最勝院の間を1日2往復走った馬車鉄道の線である。途中、大枝(武里駅入口交差点)にも停車した。

日時 平成17年4月2日(土)
集合 午前8:00 越谷駅東口
方面 春日部市内の古利根川沿い
案内者 加藤幸一

コース
越谷駅 → 春日部駅東口 → 粕壁のお酉様(神明様の酉の市) → 山中の千手観音堂 → 日光街道(土蔵) → 最勝院(春日部重行公の墓) → 古隅田川(桜の名所・古代の国境、隅田川伝説) → 古利根公園橋(千住馬車鉄道の壁面・トイレ) → 多田氏の中世文書(北条氏政の花押) → 龍神社のイヌグス(江戸時代の河岸場跡) → 春日部薬草園跡(ケシの花・現、市立中央図書館及び市民文化会館・トイレ) → 春日部市郷土資料館 → 古利根川(中世の国境)の土手道散策 → 屋敷(川久保自治会館) → 喜藏院 → 古利根川の土手道散策(後半) → 藤塚橋 → 古利根川から分流する西川跡(推定) → 日光街道の一里塚跡(備後) → 地蔵坊渡し跡 → 金野川の河道跡(春日部市備後と越谷市平方の境界線) → 路傍の石仏(昔は金野川の土手にあった) → 備後の称名寺(性の神の金精様・トイレ) → 旧金野川と旧西川の合流地点 → 武里駅(8:00解散予定)



9. 多田氏の古文書
北条氏政(1466)の花押(あし、すいじょう)がみられる中世の貴重な古文書である。
10. 龍神社のイヌグス(下喜藏河岸跡地)
高くそびえるイヌグスの木が江戸時代の船頭たちの船着き場の目印となった。
11. 春日部薬草園跡地
図書館・文化会館ができる前に、ここにケシの花の栽培で有名な薬草園があった。
12. 野焼稲荷
広大な土地を所有していた鈴木家の稲荷。鈴木家には古原の豪遊伝説が残っている。



自然が残る古利根川の土手道散策

古利根川はかつては武蔵国（現在の埼玉県と東京都）と下総国（現在の千葉県の一部）との国境でした。



藤塚村

13. 喜蔵堤（きぞうづつみ）
江戸時代、船壁宿の名主である見川喜蔵が築いた、堤防をかねた土手道。
14. 藤塚橋
昭和8年に初めて木の橋が架けられた。それ以前は渡し場であった。
15. 西川（にしかわ）
備後村の西側の周囲を流れていた川で、備後西川の真福寺の裏側を通過していた。
16. 備後の一里塚
一里塚とは、街道に1里(4町)おきに立てられて旅人の目印となったものである。
17. 地藏渡し（くわだんばた）
日光街道入り口にお地藏様があり、渡し場の目印となったのでこう呼ばれたという。

備後村

18. 会野川（あいのかわ）
平方村の南側を流れていた川。
19. 称名寺の金精様（こんせいさま）
境内に性の神様が祀られている。

平方村

「西川」の旧河道跡（推定）

自然が残る春日部の古利根川土手道散策

1. 粕壁のお酉様（神明社の酉の市）

神明社の酉の市は、毎年12月14日の大祭（たいさい）の日に市が立ちます。ここでは、熊手、お多福面、入り船などの縁起物が売られます。関東では11月中の酉の日以外に熊手市やおかめ市が開かれる例がありますが、これは鳳明神（おとりみょうじん）を独立して祀っていないため、神明社もこの例で、大祭の日に酉の市が行われます。

（「かすかべ郷土かるた」より）

2. 山中の千手観音堂（山中の観音堂）

もとは粕壁の山中に祀られていたが、道路の拡張により平成4年に神明通りの現在地に移転してきた。もとの場所は、やや東よりの南方130あたりにあった。

江戸時代、俳諧師の増田眠牛が、千手観音像が入った笈（おい）を背負ってこの地方を行脚（あんぎゃ）していたという。初めは粕壁宿の米問屋伊勢平（いせへい）に世話になった。その後、醤油屋柄勝（とちかつ）になり、離れ家を与えられ、俳諧の普及に努めた。そして明和八年（1771）三月七日に60歳で一生を終えた。死後、彼を弔うため柄勝のはからいで千手観音を安置する山中観音堂が建てられた。千手観音はその後も多くの人々によって信仰され、大正の頃まで縁日には集まって講を開いていたという。

3. 日光街道（日光道中）

東海道と同様に、初め日光海道と書かれていたが、後に海がないのに「海道」とはおかしいということで、日光道中と改められた。

この街道は、江戸日本橋から日光や奥州（東北地方）に行く江戸時代の道である。奥州街道ともいい、宇都宮で日光街道と奥州街道とに分かれる。

江戸を出発してからここまでの宿場町は、千住宿、草加宿、越ヶ谷宿、そして粕壁宿となる。粕壁宿の街道筋では、毎月四・九の日（4の付く日と9の付く日、4日、9日、14日、19日、24日、29日）に市（六斎市）が立っていた。

現在、街道筋に浜島家と山田家の土蔵（土壁で造られた倉庫）が見られる。江戸時代に江戸の町に見られた耐火建築の土蔵が、明治になると江戸（東京）近郊にも広がり、浜島家は文庫蔵として、山田家は店蔵（たなぐら）として使用された。

4. 春日部重行公の墓（最勝院）

鎌倉時代にこの地に春日部氏が住んでいたと思われる。南北朝時代に活躍する春日部重行は、下総国の春日部の地頭でこの地を支配していた。鎌倉時代の終わりに北条氏の鎌倉幕府を倒すため新田義貞のもとに鎌倉幕府の本拠地を攻めている。南北朝時代になると、南朝方に味方をし、延元元年（一三三六）一月に足利尊氏京都侵入により、天皇警護のため同年六月、尊氏軍と交戦したが敗れ、京都で自決したといわれる。この春日部重行の墓は最勝院の樹齢数百年のしいの木がそびえる丘にある。

春日部氏の館のあった場所は、最勝院の近くにある浜川戸（館を囲む堀や中国製の白磁・青磁などが確認されている）であり、春日部氏一族の氏神を祭った神社は、現在の春日部八幡神社であると推定されている。

なお、春日部の地名の由来は、古墳時代の西暦6世紀、第27代安閑天皇の皇后、春日

皇后の部民からまきっていると推定されている。春日部から粕壁と書かれるようになったのは中世末と推定される。昭和19年の粕壁町と内牧村が合併する時に町の名を由緒ある春日部氏にちなんで粕壁とせず春日部とした。また、昭和29年に市政施行の際に制定された市章は春と市祖春日部重行公の家紋をあらわしたものである。

5. 十文橋

明治24年に梅田に住む岩松氏によって古隅田川に架けられて大正時代の末まであった「十文渡し」と呼ばれた橋があった。橋の渡り賃が十文（一厘）であったのでこう呼ばれた。この橋は、市内梅田や宮代町から粕壁への交通の要所にあり、多くの人々に利用され、親しまれていた。現在も「十文橋」と名付けられた橋が架けられている。

6. 古隅田川（かつての隅田川）

古隅田川は古代においての利根川本流と推定され、大河であった名残としての河岸砂丘が見られる。春日部市内を流れる古隅田川とそれに続く越谷市内を流れる元荒川が武蔵の国と下総の国の国境（くさか）となっていたのである。

つまり、古隅田川の北岸は武蔵国で、われわれが立っている南岸は下総国であった。

のちに国境は古隅田川（元荒川）から古利根川（かつての利根川の本流）に変更となる。つまり、われわれが立っている古利根川の西岸は武蔵国に含まれるようになる。古利根川の東岸は下総国のままであった。

なお、春日部市内にあるこの古隅田川には、梅若丸伝説や業平伝説が残っている。

◎梅若丸伝説のある梅若塚・・・平安時代、都（京都）生まれの梅若丸が人買いにだまれ、東国に連れて来られ、ここで病に倒れた梅若丸は人買いによって隅田川に投げ込まれてなくなった。村人は梅若丸を哀れに思い、塚を築いた。現在、新方袋の満蔵寺に梅若丸の塚がある。

◎業平伝説のある業平橋・・・平安初期の歌人、在原業平が旅行で都（京都）を離れて、隅田川に来たとき、見慣れない水鳥を見て船頭に尋ねたところ、『都鳥（みやどり）』（ユリカモメ）と教えられたために、懐かしい都での生活を思い出し、
「名にしおはば いざ言問はむ都鳥 わが思う人は ありやなしやと」
と詠んだ。豊春小学校近くに明治21年に架けられた業平橋がある。それ以前の業平橋は100メートルほど上流にあった。古隅田川に架かる業平橋は業平が渡った橋との伝説がある。

7. 古利根公園橋と彫刻

昭和59年11月に完成。公園橋には、市の花である藤の花をデザインしたパネルスクリーン、県の花であるさくら草をデザインした橋の継ぎ手部、麦わら帽子をデザインした照明灯、シラコバトをデザインした風見鶏、屋根付き休憩施設、幅13メートルで、高さ2.5メートルの滝、5体の彫刻（ブロンズ像）、円形ステージなどがある。円形ステージの中心は方位盤となり、その下にはタイムカプセルが保管されている。

創生事業の一環として『彫刻の街づくり』が平成元年に古利根公園橋からスタートした。

《公園橋の彫刻》

- 『ジーンズ 夏』（平成元年作品） ジーンズをはいた若い女性を表現
- 『茉莉花（むらさき）』（平成元年作品） 微妙な体の線のねじれによる女性の美しさ
- 『フォーム』（平成2年作品） 腰掛けた女性が足先に手を伸ばしている姿
- 『夏』（平成2年作品） 夏の高原にすくっとたつ少女を表現
- 『春陽』（昭和59年、平成30周年作品） 麦わら帽子をかぶった女性
- 『思い出』（平成5年作品） 少しうつむきかげんの少女を表現

《市民文化会館の彫刻》

『神話Ⅱ』（平成7年）

ギリシア神話のゼウスとレダを表現

『道標・鳩』（平成2年作）

子供達が直に手に触れられるようにと設置

8. 千住馬車鉄道の壁画（古利根公園橋）

わが国最初の馬車鉄道は明治15年（1882）の新橋と日本橋間。明治26年（1892）2月7日に千住茶釜橋（現在の千住新橋の下流側の荒川放水路内）と越ヶ谷（大沢）の間に営業が開始され、6月1日からはさらに越ヶ谷と粕壁（最勝院）間が開通した。

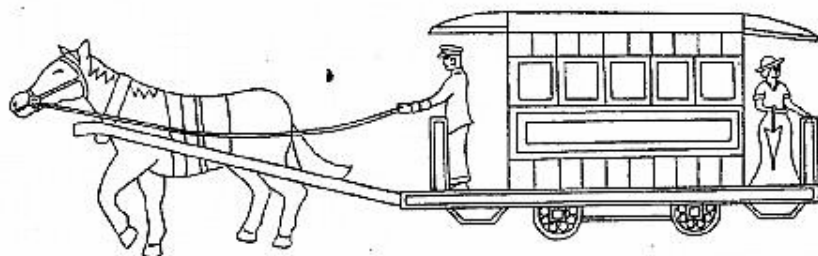
千住・粕壁間の運賃は27銭で、馬車鉄道は千住・粕壁間を片道3時間1日2往復した。

千住（茶釜橋）～竹の塚～草加～蒲生（蒲生河岸）～越ヶ谷（大沢）～武里（大枝）～粕壁（最勝院前）

終点の粕壁の手前の大枝（現在の武里駅交差点付近）にも停車した。

しかし営業不振のため明治30年4月には越ヶ谷と粕壁の間の営業が停止する。粕壁まで馬車鉄道が走っていたのはわずか4年間である。

なお、東武鉄道が開通したのは明治32年末のことで、千住馬車鉄道の後を受け継いだ草加馬車鉄道も汽車という時代の波に乗り切れずに馬車鉄道は廃れていく。



古利根川に架かる公園橋の北詰の壁画「テト馬車」（雨宮一正作）

〈模写 加藤幸一〉

9. 多田氏の古文書（多田時計店）

戦国時代の永禄12年（1569）に北条氏政が多田新十郎に出した感状（大名などが部下の戦功を賞して与えたもの）の古文書である。春日部市の文化財に指定されている。現在「多田時計店」に保管されている。

「昨十三夜 於薩山 敵夜懸の刻 敵老人針字文六と合討 高名感悦候 弥可竭粉骨者也、仍如件 永禄十二年己巳 三月十四日（北条氏政の花押） 多田新十郎」

【昨十三〔日〕夜、薩山（駿河国）に於いて敵夜懸の刻、敵老人針字文六と合討、高名

感悦に候、弥粉骨を竭すべきもの也、仍て件の如し、永禄十二年己巳三月十四日

（北条氏政の花押） 多田新十郎】

10. 碓神社のイヌグス

ここは下喜蔵河岸があった所で、河岸の船着き場そばの碓山（いかりやま）にある高くそびえるイヌグス（樹齢六百年）は、古利根川を上り下りする帆掛け船を操る船頭たちの目印となった。碓神社、碓山の名前の由来はここに碓（錨）を降ろしたからであろう。

11. 春日部薬草園跡地

わが国で最初の薬用植物栽培試験場。現在の市立図書館、市民文化会館の地にあった。昭和55年2月に筑波研究学園都市（茨城県谷田部町）へ移転するまでここに世界各地の薬用植物やく3,000種類の栽培が行われ、薬学の発展に大きく貢献した。特にアヘン

の原料となるケシの花がたくさん栽培されていたことで知られた。

現在「ミニ薬草園」があり、文化会館の周囲にさまざまな樹木や植物が植えられている。

12. 野端稲荷

江戸時代より明治・大正まで盛り300町歩といわれ、この付近一帯を所有していた鈴木家の稲荷です。この稲荷は田持稲荷で稲荷自身が田を所有し、その収穫した稲で祭祀維持をしてきました。祭神は野端稲荷大明神と申しまして大変霊格の高い神様です。

川久保地区の8軒と鈴木家（現在は足立区に居住、かつての鈴木家の屋敷は現在のロビンソン百貨店の正面あたり）で、現在も2月の初午の日に『おびしゃ』が行われ精進料理が振る舞われている。

鈴木家は、江戸時代、吉原（遊郭）での豪遊で、庭に積もった雪を溶かそうと、その庭にお金を撒いて周囲の者たちに拾わせて雪を解かせたという逸話が地元伝わっている。

13. 喜蔵堤 ☞ 別紙参照

14. 藤塚橋

昔は、現在の藤塚橋の上流と下流に渡船場（渡し場）があったと推定されています。

昭和8年のこと、藤塚橋の石碑によると、坂巻治平氏ら十人が藤塚橋組合を結成し、資金八百円で有料の木橋を架けた。その後、この木橋は、昭和29年に市制を施行する際に買収され、昭和40年1月1日に現在の新橋に架け替えられたとのことである。

15. 西川

現在の藤塚橋の上流あたりの古利根川から分かれて西流し、備後村西川の真福寺の北側を通り、備後村の村境に沿って、一ノ割村、中野村、大場村、大畑村との村境に流れていた川が存在していたと推定されている。これが「西川」と呼ばれる川である。この西川は、備後村を回ったあと、現在の越谷市平方の会野川で平方村の村境を流れていた会野川に合流したと思われる。西川と合流した会野川は、現在の越谷市平方の東端、川久保まで流れ、古利根川に合流したのである。戦後までその会野川の川跡の名残が見られていた。しかし今では、西川は勿論、会野川もその名残が見られない。

16. 備後の一里塚

1里塚は、江戸日本橋を起点として、街道に1里（約4キロ）づつ作られ、旅人の目安となった塚である。街道の両側に見られ、土を盛ってその上に榎（えのき）や松を植えた。

17. 地藏渡し（地藏坊渡し）

大正の頃は、片道1銭、自転車を伴うと2銭。馬を乗せた。船頭は渡し場のそばに住んでいた千葉氏である。日光街道よりこの渡し場に行く目印が現在も旧国道4号の森泉家そばの道端にあるお地藏様である。

※以上の1から17に関しての解説文は、主に「春日部市昔むかし」「かすかべ郷土かるた」（春日部市教育委員会発行）を参照した。（加藤幸一）

18. 会野川

平方村の林西寺の西側から古利根川から分かれて、平方村の村境に沿って、備後村、大枝村、船渡村の村境に流れ、平方村の東端、川久保で古利根川に合流した川である。

19. 称名寺の金精様 ☞ 別紙参照



増田眠牛は江戸時代の俳人で、宝暦年間（一七五一〜六三）に修験者が背負う箱、笈（あし）を肩にした六部姿で粕壁に現れたと伝えられています。

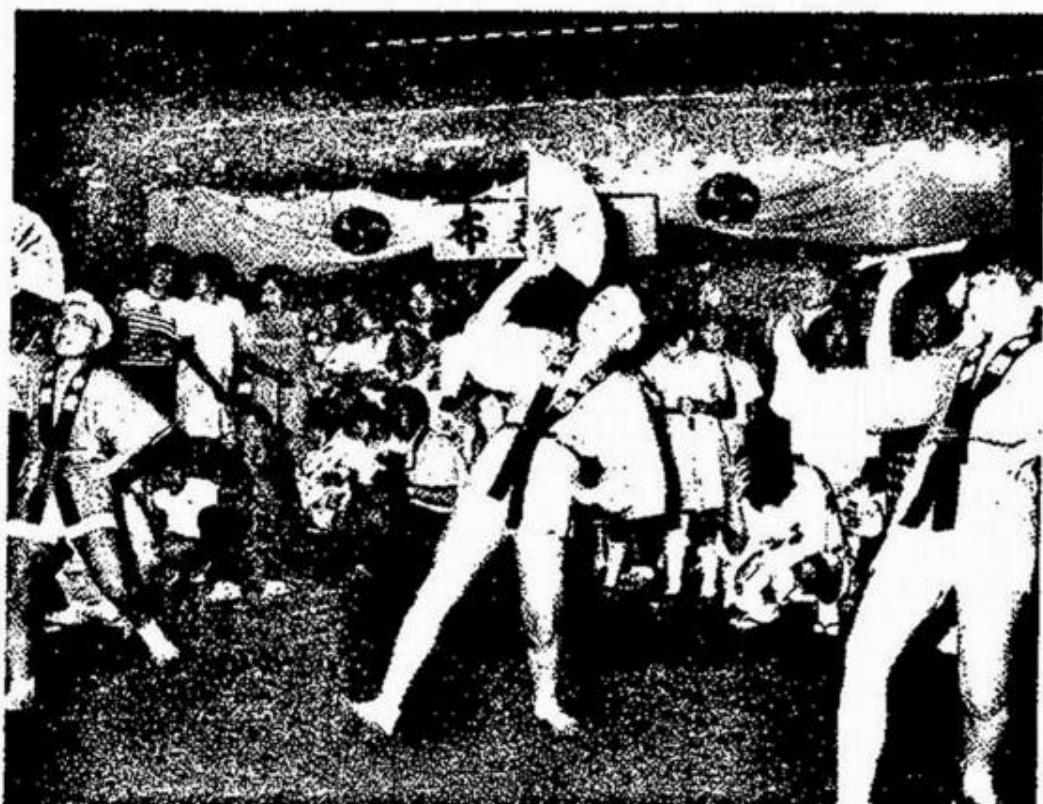
眠牛は、はじめ上町の米問屋「伊勢平」に世話になりました。その後、しょうゆ屋「栃勝」に移り、離れ家を与えられ、俳句の普及に努めました。

伊勢平が、旅館で客との囲碁に苦戦し「へただなー、まづいなー」を連発していました。そこへ、隣室で客と俳談を交わしていた当時俳聖といわれた蓼太が、自分の句がけなされたものと思い、伊勢平に詰め寄りました。伊勢平は囲碁のことだと弁解しましたが、蓼太は聞き入れず厳しく追及しました。そこで、伊勢平は眠牛に助けを求め、眠牛

が蓼太に会って句の非を指摘し、伊勢平を救いました。眠牛には俳聖蓼太を批評できる実力があったという訳です。

眠牛は明和八年三月に六十歳で亡くなりました。彼の遺骸は、成就院に葬られています。眠牛の死後、彼を弔うため栃勝によって山中観音が建てられました。中には、眠牛が持っていた観音画像や杖などが保存されています。近くには、「かかれぬぞ もういのち毛の つくづくし」という彼の辞世の句の碑も建てられました。

写真の建物は春日部駅東口にあった山中観音堂で、平成四年に道路拡幅のため近くに移転されました。

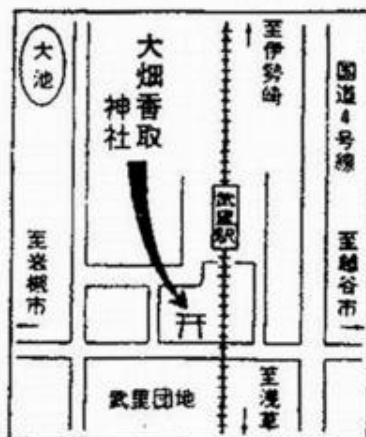


毎年七月十五日に近い土曜日の夜、武里駅近くの大畑番取神社では、そろいの浴衣に赤のあげ鉢巻き、白足袋に赤緒の草履をはいた若衆の「やったり踊り」が行われます。

「ヤッタリナー、ヤッタリナー」のはやしことばにのって奉納されるこの踊りは、昔、大畑地区と備後地区との間にあった不毛の土地をめぐる押し付けあいから起こったと言われています。当時この土地を持つと余計な夫役を負うことになるので、人々は互いに押し付けあっていました。どちらの地区で持つかは、いつになっても決着がつきません。そこで相撲で決めることになりました。結果は大畑地区の勝ち。人々はうれしさのあまり「ヤッタリ、ヤッタリ」と

はやじたて、踊り舞ったのが始まりと伝えられています。やったり踊りは「扇子踊り」と「手踊り」の二種類に分かれます。「念仏おどり」、「みろくおどり」とも呼ばれ、単調な中に陰影の深い念仏調の独特の歌が入り、大きな動きで屈伸の激しい動作は、いかにも男性的です。

この種の民俗行事は、県内でも大変に珍しいもので、昭和三十年、県の無形民俗文化財に指定されています。



《隅田川伝説》



平安時代の歌人で、六歌仙の一人としても有名な在原業平は、第五十一代平城天皇の皇子安保親王の第五子に生まれ、伊勢物語の主人公とされています。業平は才気に優れ、多くの歌を残しています。しかし政治的には不遇で、藤原氏に疎まれ、都を離れ東国に下った伝説があります。その際、春日部にもいくつかの故事を残しています。

「名にしおはば

いざ言はむ 都鳥

わが思うひとは

ありやなしやと」

この歌は、業平が旅を続け、武蔵と下総との国境を流れる隅田川で見慣れない水鳥を見て、船頭に尋ねたところ「都鳥」と教えられたため、懐かしい都での生活を思い出し、

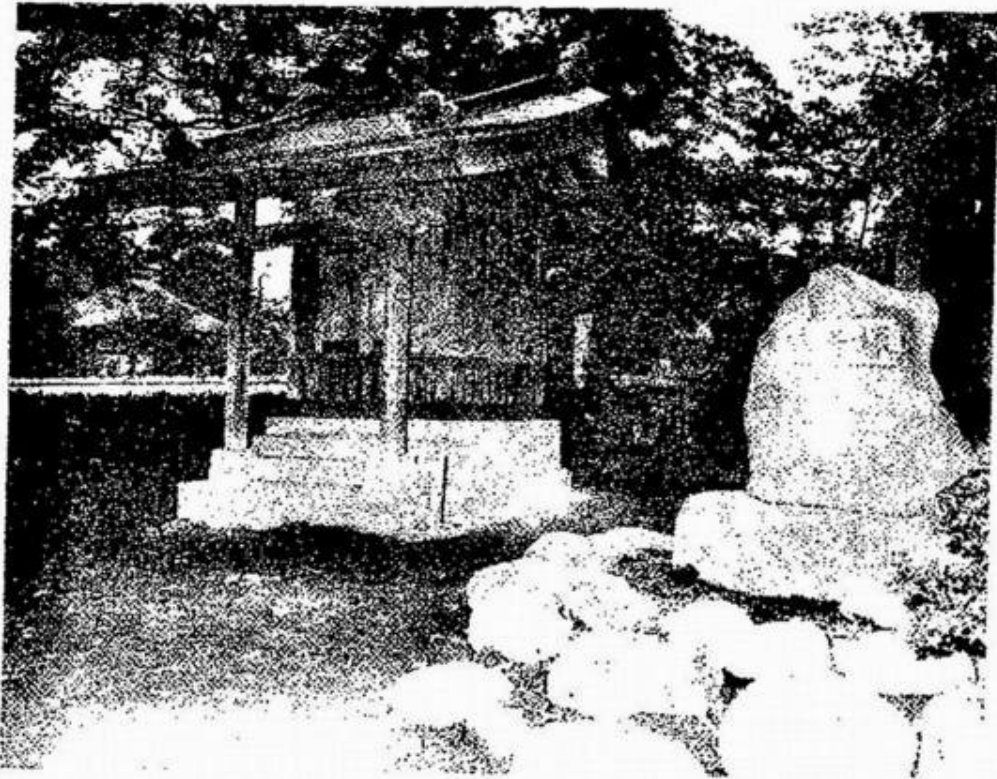
郷愁を込めて詠んだ歌と言われている。

この隅田川が現在の古隅田川で、古利根川と古隅田川が分岐する辺りで詠まれたものとも言われています。

また、豊春小学校東側に架かる業平橋は、明治二十一年に県道が開通した際に架けられたものです。もともとは百メートルほど川の上流にあったもので、その名前のとおり業平が渡った橋と言われています。



《隅田川伝説》



八木崎駅の西方約一キロにある満蔵寺の門前には、謡曲「隅田川」で名高い梅若丸を葬ったと伝えられる小さな塚と社があります。

梅若丸は、平安時代に京都北白川の吉田少将惟房の子として生まれました。七歳のときに比叡山月林寺に入りましたが、十二歳のとき、人買いにだまされ、東国に連れていかれる途中、市内の新方袋あたりで、病に倒れ、足手まといとなったので、古隅田川に投げ込まれてしまいました。梅若丸は、「尋ね来て問はば答えよ都鳥 隅田川原の露と消えぬと」歌を詠んで息絶えてしまいました。村人は、梅若丸を哀れに思い塚を築き、柳を植えたとのことです。やがて、梅若丸の母（花子

の前)は、この地で我が子の死を知り、その供養のため出家しました。あるとき、近くの池に遊ぶ都鳥を見て、「くみ知りてあはれと思へ都鳥 子に捨てられし母の心を」と詠むと、水面に梅若丸の姿が浮かび、思わず池に身を投げてしまいました。

この母と子の悲しい運命に同情した満蔵寺の開山祐閑和尚は、木像を彫り、堂を建て安置しました。この堂は、子育て地藏尊として今なお多くの信仰を集めています。





春日部女子高等学校の東側から、古利根川の流れに沿った緑小学校の北側にかけては今も緩やかな段丘の堤が残っています。この堤は、喜蔵堤と呼ばれ、江戸時代に粕壁宿の名主を務めた見川喜蔵という人が、たび重なる水害から田畑の耕作物を守るために構築したものとされています。喜蔵は、元文三年（一七三八）生まれ、後に名主になると多くの人の意見を聞き、何事も公平に行ったので、人々から慕われていました。天明三年（一七八三）死者三万五千人余りを出した浅間山の大噴火では、田畑が火山灰で埋められ、多くの人々が飢餓に苦しみました。喜蔵は、飢えた人々にかゆを与え、宿内の地主を説き、雑穀を放出



させ窮状を救いました。また、寛政三年（一七九一）八月の洪水では、降りしきる雨のなか、喜蔵自身が家々を説いて回り、古堤の上に土俵を築かせ、下流の作物の流失を防ぎました。ほかにも、喜蔵は多くの善行を行ったので、幕府から、その功績をたたえられて、銀若干をもらい、一代限りの帯刀と子孫に至るまでの苗字（見川）を名乗ることを許されました。

